

ロルフアー・田畑さんのあれこれ。

ロルフアー

見聞録。

ロルフアーの田畑さんから編集部にメールが。

「スロベニアで欧州統合医療学会に行つてきました」。

初めて参加する学会という場で、

いろんな発見があったとのこと。

田畑さんの発見を伝える新章、スタートです。

文・田畑浩良

2018年9月21日からの3日間、欧州統合医療学会（ECIM）がスロベニアの首都・リュブリャナで開催された。この学会は、従来型医療の限界を超えて、医療費を抑え最大限の治療効果を上げるために設立され、世界各地の伝統医療や最新の波動医療、音楽療法など幅広い分野の研究結果が報告される場となっている。数年前より大村忠昭医師を創始者とするバイオデジタルオーリングテスト（以下、BDORT）に大きな注目が集まり、大村先生と共に日本の第一人者である下津浦康裕医師もここ数年にわたり本学会に招聘されている。この学会にもこの国にも全く縁がなかったが、下津浦先生からお誘いいただき、今回エントリーすることにした。

下津浦先生とは、ロルフアーの

プラクティショナーになる前からの縁で、古巣の会社に勤務した最後の一年、BDORT研究をバックアップする仕事の担当となり大変お世話になった。診察を間近で見ると、難治療疾患や癌の患者さんが、効果的に寛解するケースを数多く目の当たりにした。BDORTによる極めて非侵襲的な働きかけによって、治癒が促される現場に立ち会った経験は、その後の治療全般に対する考え方やロルフアーの実践にも大きく影響を受けている。

はじめての東欧

首都・リュブリャナは、この時期、天候・気温は東京とほぼ同じ。中心地にもかかわらず空気はきれい、しかも治安もよい。伝統料理は、肉々しい

が、アドリア海に面していることもあって、蛸やイカは相当美味。物価も安く、ワインは、グラスでいたい3・5ユーロで飲める。一品のお皿の量もちょうどよくチップも基本ないため、気が楽。"Slow" というスロベニヤリテイ珈琲を出すおカフェを発見、現地入りしてから2日間はそこに入り浸って猛然と発表の準備を進める。まったく目処が立ってないまま現地入りしたので観光する余裕はなかった。

BDORTの欧州での進展

BDORT診断技術は私が知っている開発当初より格段に進化を遂げている。診断方法も洗練され、たくさんの方の項目を一度にチェックできる。御年84歳になられた大村先生の研究に対する情熱は衰えることなく健在で、新たな発見を続けていることに感動を覚えた。今回、ビタミンD³には多岐にわたって強力な治療効果があるなどの最新の知見を次々に報告されていた。カロリンスカ医科大学のノーベル医学生理学賞選考委員の元・議長やソニー（株）の創始者の一人、井深大氏らの有識者が早くから注目したBDORT。日本ではそれに見合う認識と普及が進んでいるとは言い難いが、すでに四半世紀が経過してしまっただけで、欧州がその価値と意義を認め、積極的に導入しようという機運が高まっている。

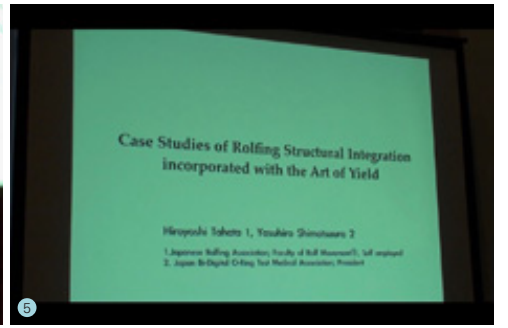
今のところ珍しい療法

いくつか見学した発表のうち、「ヒル



①旧市街と新市街をつなぐ橋から、遠くに望むリュブリャナ城。9世紀に建てられたとのこと。②散歩するだけでも楽しい、旧市街にある石畳の通り。③アドリア海のイカのグリルとスロベニアワインでランチ。④早い時間から賑わうリュブリャナ川沿いのレストラン。

ドセラピー”の症例報告が興味深かった。この吸血性の寄生虫“蛭”を使用した療法は、ロシアで今盛んに行われている、それを推進してきた演者は、8年前最初に紹介した当時、トンデモ療法扱いされたが、その後これととりいれる医師も国を超えて徐々に増え続け、現在は確固たる治療法として確立されたことを苦労語を加えて報告していた。蛭が、医療現場で、創傷の回復を促したり、眼病治療にも役立てられている



⑤ ロルフィングの症例についてプレゼンテーション開始。⑥ 質疑応答も。⑦ 下津浦先生（右）、BDORT協会スタッフの大城さん（左）と。⑧ ヒルドセラピーについてのロシア人の講演者による報告。

という。ロシア人の演者は世界的にも先駆的存在で、数々の逆境や偏見を乗り越えてきた凄みを感じた。

ロルフィングの症例報告

初日の夕方、下津浦先生らの報告の後に自分の出番がやってきた。演台から大村先生がウトウトされているのが見えたので、「大村先生起きてますか？」とマイク越しに呟いてのスタート。まずは、ロルフィングを圧力をでるだけ必要としない繊細なやり方へと改変した経緯とその原理についての

説明。続いて、腰椎カーブの顕著な前彎傾向が変化するに伴って、少年の毎冬起こっていた喘息発作が治まった症例、そして、80代男女の深刻な便秘・排泄の改善、坐骨神経痛と下肢の麻痺の感覚改善の症例について報告した。BDORT的には、足のアーチの活性化にはいくつかの電磁波的に負の要因をキャンセルする治療効果があることが明らかになっている。ロルフィングは対症療法的に働きかけることではないが、結果としてのさまざまな症状改善につながる作用機作の説明になるのではないかという考察に持っていった。

今回の症例が、イールドを用いた微細な刺激で達成したことに興味をもってくれる参加者もいたが、ロルフィングについてはほとんどが初耳という。会員数700名を抱える欧州ロルフィング協会（ERA）がミュンヘンに存在するにもかかわらず、ロルフィングがまったく知られていないのは意外だった。それだけに地道に認知度を上げて、普及させていく意義は大きいと感じた。

日本人発の技法

日本からは、筑波技術大学の櫻庭陽准教授が、日本人医師が考案したM.T.S.T（経絡テスト）という診断・治療法のアスリートに与える有効性を報告していた。身体の不調の改善に有効なデータがわかりやすく示されていた。私自身名前すら知る機会がなかったが、M.T.S.Tは、ドイツやアメリカでも徐々に広がりを見せているという。日本発の技法が、国際的にも認識されているのは誇らしい。ただ、自国よりも海外での評価が先行し、逆輸入の形でしか国内で普及・利用されないとしたら、実に残念なことである。

同大学の鮎澤聡教授は、私の前に筋膜とコヒーレンスに関する研究を報告されていたが、私のやっていることと非常に共感する内容だった。

芸術的な診察

学会がクローズに向かう会場の片隅で、ハンガリー人に対して、大村先生が診察を開始。左下部の肋骨に痛みがあるとのことで、診てもらいたいとのことだったが、病歴を予め伝えていないにもかかわらず、BDORTによって、大腸癌だったことを言い当て、痛みの原因は膵臓の問題があるという診断。膵臓の癌化を食い止めるための処方方をその場で決定。その一連の流れはまさに芸術的だった。

最後に

会社員生活最後の1年にお世話になった下津浦医師に誘っていただいた今回の出張。23年前の退社時には、もはや学会で発表する機会が自分に訪れようとは夢にも思わなかった。

発表を終えて、ぼっとしているところ。学会への参加はとてよい経験になった。

単に周りに情報がなかったが、ただで、多くの魅力的な国々があるに違いない。学会中、旧・ユーゴ圏のセラピストが、イールドの技法に興味を持ってくれ、自国での私のワークショップの開催に意欲をみせてくれた。今後の展開が楽しみである。



※1 ロルフィング、ロルファー、Rolf Movement[®]は、米国ロルフ研究所の商標であり、米国以外に日本を含む他の国々で登録されていません。
※2 The Art of Yield[™]と呼ばれる技法で、ロルフ研究所の教員であるCarol Agnessと筆者が発展させたアプローチ。細胞の持つ原始的な振る舞いの性質を利用しており、触れずに離れた位置からの働きかけも含む。

田畑浩良



たはた・ひろよし ●ロルファー。(株)林原生物化学研究所の研究員を経て、1998年米国 Rolf Institute によってロルファーとして認定される。動的感覚を伴った繊細なタッチで行う個人セッションを中心に活動。2009年以降 Rolf Institute のムーブメント教員として「肚」「間合い」といった日本固有の感覚と概念を導入しつつ、Rolf Movement 認定コースなどの継続教育のプログラムを国内外で提供している。www.rolfinger.com